「アショ調月報」

1972 年 1月号

中

国

政

治の

現

段

階

その

動 揺

ع 亀

裂

に出てきたいろいろの問題を分析してみたいと思います。

その分析は、まず、陳伯達失脚の背景。これは私は失脚という

0

9

それから二中総以後というように経過を振返り、それからその間 あったかという問題、それから九全大会から昨年の二中総まで、 十分な分析がない。そこで、まず第一に九全大会の路線とは何で あるわけですけれども、九全大会以後の問題に関しては必ずしも して、九全大会以後の中国の政治動向にしぼってお話してみたい んで一度、整理しておいたほうがいいのではないかと思い、主と 傾向がありますので、「中国政治の現段階」については、このへ がありますが、このところ中国の内政については「分析回避」の と思います。九全大会までについては、従来、いろいろの分析が 日中関係や「中国と国連」といった問題については多くの論総

> いて、私なりに情報を整理し、問題点に触れてみたい と 思 いま みたい。それから三番目に、注目を集めている最近の出来事につ の柱としましては、中国の内政と外交との関連をもう一度考えて

ーシップの動向などを、第一の大きな柱にしまして、次に二番目 台頭の背景、周恩来グループの復活の意味、それから中央リーダ ことをほぼ断定しているに近いわけですけれど、それから黄永膀 (東京外語大学助教授) 嶺

治動向を全体的に考えてみますと、今回起こっている問題は、実は な形だけにとってみますと、それは単に未確定情報にしかすぎな いという面があります。しかしながら、九全大会以降の中国の政 非常に短い時間だけをジャーナリズムの上で関心が示されたよう ふうに考えざるを得ないんです。それはこの九月から十月までの かなり重大な政治的なイシューなり、コンフリクトがあるという で、結論部分からお話しますと、私はやはり、中国に、現在、

26

ます。

◇九全大会路線

されています。九全大会以降の大まかな政治の動きなんですけれども、まず、九全大会路線というものは何であったかという、まず、九全大会以降の大まかな政治の動きなんですけれども、

九全大会というのは、いろいろの経過を分析してみればみるほと、これは条件が非常に未成熟のまま、ほぼ六八年段階から進んだ文章の拾収への状況の中で、毛林主流派がいわば強行的に上からの党の再建をはかろうとしたものであったというふうに考えざるを得ないわけですね。これは九全大会にいたる経過を分析してみてもそのとおりのことがいろいろいえると思います。しかもそこで確立された体制というのは、それでは毛林主流派の完全な勝利のもとでできた体制であったかどうかというと、実は私は、そうではなくて、いわば暫定的な非常時体制であったということがいえると思います。

要因として、毛沢東が軍に全面的な介入を依頼したことが逆に毛脚しておるわけで、それと同時にこの文革そのものがもたらしたいう形ででも九全大会をともかく上から招集しなければいけなくいう形ででも九全大会をともかく上から招集しなければいけなくなったということがいえます。特に、九全大会の行なわれる一年なったということがいえます。特に、九全大会の行なわれる一年なったということがいえます。特に、九全大会の行なわれる一年なったということが、党における傷があまりにも深かった。それはそれわれたさまざまな潮流の一種の妥協の産物であった。それはそれわれたさまざまな潮流の一種の妥協の産物であった。それはそれわれたさまでは、

彪の政治報告の中で特に目立っていることは、対ソ強硬路線、対わけでございます。しかしながら九全大会はともかく一つの方向を出したことは事実なんであって、それは内容的には林彪の政治報告、党規約についてはもういうまでもないんで、林彪の政治報告、党規約に知りで、それは内容的には林彪の政治報告と新しい党規約に無約されているわけです。



報告する中嶋氏

と位置づけられるのではないか。特に内政面ではどういう問題が終るを持出してくる。そういう九全大会路線というものをもう一路線を持出してくる。そういう九全大会路線というものをもう一路線を持出してくる。そういう九全大会路線というものをもうの九全大会から昨年九月の第二回中央委員会総会(二中全会)までに、非常に大きな変化を見せ、この九全大会路線は今日に至る路線を持出してくる。そういう九全大会路線というものをもう一度振返ってみたんですけれども、この九全大会路線は今日に至るの九全大会から昨年九月の第二回中央委員会総会(二中全会)まの九全大会から昨年九月の第二回中央委員会総会(二中全会)まの九全大会から昨年九月の第二回中央委員会総会(二中全会)までをやはり一つの区分とすることができるわけで、この過程は具体的な説明は省きますけれども、九全大会路線のいわば後退過程体的な説明は省きますけれども、九全大会路線のいわば後退過程体的な説明は省きますけれども、九全大会路線のいわば後退過程体的な説明は省きますけれども、九全大会路線というと対外政策における根本的な路線だったと思うんです。これがいわば九全大会との内外政策における根本的な路線だった。

これが全国的に成立したのは、何と今年の八月であった。年、七〇年の十一月に湖南省をきっかけにして党委員会ができ、九全大会が国内的な課題の第一番目にした党の再建が、漸く去

◇再建された党の中身

は、八全大会の中央委員会と九全大会の中央委員会と比べてみまく軍人の圧倒的な優位というものがあったわけで、文革というのーンとの大きな違いがある。革命委員会パターンもいうまでもなは敢えて省略いたしますが、どう見てもこれは旧革命委員会パタすでにいろいろと分析を加えている人がいますので、私はここですれため次に、再建された党の中身なんですけれども、これは

これも今までいわれている問題です。に地位を占めているだけではなくて、旧幹部の優位が見られる。に地位を占めているだけではなくて、旧幹部の優位が見られる。だ新しい党委員会はそういうものとも大きく違って、軍人が非常なか「三結合」というような形ではいっていた。ところが再建されず金製会の場合には、名目的にせよ、ある一定部分の大衆代表部というものは傷つかなかったんですけれど、にもかかわらず、部というものは傷つかなかったんですけれど、にもかかわらず、

ろいろ出ている。 ります。そういう問題がすでに内政面で去年の二中全会までにいります。そういう問題がすでに内政面で去年の二中全会までにい間、毛沢東はほとんど政治の前面には出なかったという問題があば非毛沢東化への先駆けといわれるものです。それから、この化の方向を解消しようとする徴候が若干現われております。いわそれから二中総でやはり少しずつ出てきた問題は、毛沢東絶対

いて、すでに林彪の九全大会の報告を否定するような方向が幾つれたとおりになった。ところが、そういうふうになった時点におあったわけで、これはまさに九全大会の路線からすれば、予想さあったわけで、これはまさに九全大会の路線からすれば、予想さあったわけで、これはまさに九全大会の路線からすれば、予想をあますと、中ソ戦争の危機が最も深刻であったのは六九年八月で来がバックアップするような形でいわば現実派の、リアリストの来がバックアップするような形でいわば現実派の、リアリストの来がバックアップするような形でいわば現実派の、リアリストの表すと、中ソ戦争の危機を回避する方向がむしろはっきり出てきた。で、これをめたったわけで、これはまさと、この間、少し具体的に見ている。この間に中ソ戦争を強調した中ソ対決、これはご承知のように、この間に中ソ戦争を強調した中ソ対決、これはご承知のようによったが、これを大会が一くないが、から外交面を考えてみますと、まず第一に、九全大会が一くれから外交面を考えてみますと、まず第一に、九全大会が一

訪問における演説などを含めてその徴候を示している。ソ国境会談に至る。それからさらに翌七○年六月の黄永勝の平壌から現に九月には、周恩来・コスイギン会談が開かれ、十月に中年八月一日の黄永勝の有名な、ソ連の名指しをやめた演説。それ中ソ間の正常化への努力が見られる。そしてたとえばそれは六九か出てきている。つまり中ソ戦の危機を回避するだけでなくて、か出てきている。つまり中ソ戦の危機を回避するだけでなくて、

の大きな変化だと思います。

一方、外交的にもう一つ重要な問題は、この間に、これも九全の大きな変化だと思います。
これは六九年十月に周恩来が中路線とは違って、周恩来を中心として国際社会への復帰の指向が路線とは違って、周恩来を中心として国際社会への復帰の指向が路線とは違って、周恩来を中心として国際社会への復帰の指向が路線とは違って、周恩来を中心として国際社会への復帰の指向が路線とは違って、周恩来を中心として国際社会への復帰の指向が路線とは違って、周恩来を中心として国際社会への復帰の指向が路線とは違って、周恩来を中心として国際社会への復帰の指向が路線とは違って、周恩来を中心として国際社会への復帰の指向が路線とは違って、周恩来を中心として国際社会への復帰の指向が路線とは違って、周恩来を中心として国際社会への復帰の指向が路線とは違って、日間に、これも九全の大きな変化だと思います。

◇幻の窓法草案

にお話しますけれども、とにかく幻の憲法草案が出て、それにはで、それが出ただけでどうなっているかわからないという、のちは、憲法草案が作成されたという問題も、いわばこれ は 現 在 まる文革派の巻返しがあったのではないか。これはその第一の徴候るような方向が出つつある中で、いわば毛沢東、林彪を中心とす三つ目の大きな特色としては、一方でそういう九全路線を否定す三つ日の大きな特色としては、一方でそういう九全路線を否定す

時期だろうと思います。 時期だろうと思います。 のただけに、そういう潮流が内部的にいろいろからみ合っていた過程というものは、九全大会そのものがそういう妥協の産物であいあるところを見ますと、この、九全大会以後ほぼ一年五ヵ月のにあるところを見ますと、この、九全大会以後ほぼ一年五ヵ月の問題として、例の七〇年五月の毛沢東のアメリカ帝国主義に対九全路線が全面的に掛込まれていたということ。それから二番目

います。 る。それから二中全会の決議そのものにおける徴妙な変化がござる。それから二中全会の決議そのものにおける徴妙な変化がござか。 それは昨年九月に二中全会が開かれるわけですけれど、その主義的なグループが勝利したというふうに見ていいの で は な い主義的なグループが勝利したというふうに見ていいの で は な いれます。

ると思います。

なと思います。

なと思います。

なと思います。

ないうに、文革派の凋落という問題があるわけ、単に旧幹部ということでなくて、文革の過程においてかなりは、単に旧幹部ということでなくて、文革の過程においてかなりは、単に旧幹部ということでなくて、文革の過程においてかなります目立ってきているということですね。それから第二 番目にます目立ってきているということですね。それから第二 番目にます目立ってきているということですね。それから第二 番目にます目立ってきているということですれど、二中全会以後、今日までの問以上が二中全会までですけれど、二中全会以後、今日までの問以上が二中全会までですけれど、二中全会以後、今日までの問

◇陳伯達の失脚

まあ非常に概略的にお話しましたけれど、次にこの間の主要な

うと思います。 失脚せざるを得なかったのではないかということがいえるんだろいます。場合によると二中全会そのものにおいてすでに陳伯達がて、私はむしろ、陳伯達の失脚というのはまちがいないように思意見はこの間の問題を十分フォローしていなかったか ら で あっことがいろいわれているようでありますけれども、そういうとして陳伯達失脚の背景。陳伯達が失脚したか、しないかという問題を少し断面的にとってみたいんですが、まず第一番目の問題

具体的には七〇年八月一日の建軍節以降、陳伯達は姿を現わし 具体的には七〇年八月一日の建軍節以降、陳伯達は姿を現わし 具体的には七〇年八月一日の建軍節以降、陳伯達の と、この六月二十四日の『人民日報』に、「遵義会議の光に照ら と、このが出ておりますが、このは、「第4年の と、このが出ておりますが、このは、「第4年の と、このが出ております。

いうことは、文革のときのいわば「左」派批判とはまた違った意ということを考えますと、この問題をあえて最近強調していると陳伯違そのものが従来から中国共産党の「左」のイデオローグだ明・劉少奇を含め、「左」翼日和見主義を批判している。しかもても、これもなぜこういうことをいうかというくらい、いわば王それからこの七月一日の『人民日報』ほかの共同社説を見まし

び軍人の陳伯達に対する憎悪というものはたいへん激しいものだいうことは十分考えられるわけですね。それから特に旧幹部およやりすぎたわけでありますから、今度は彼が犠牲者になり得るとけですが、いわば身分をもわきまえず、あまりにも文革でもって、陳伯達の失脚ということは以上の点から推測としても可能なわ味を持っているわけです。そんなような問題があります。

ろうと思います。

全く現われていないという問題があるわけです。

さく現われていないという問題があるわけです。従来からもこったのか、の間の意法草案を見ますと、どうもこれは唯測ですけれど、私は新憲法草案は、どう見ても陳伯達の起れは推測ですけれど、私は新憲法草案は、どう見ても陳伯達の起いは推測ですけれど、私は新憲法草案は、どう見ても陳伯達の起いは、この間の意法草案を見ますと、どうもです。従来からもこういいの間の意法草案を見ますと、どうもでは、どう見ても陳伯達の起いにようとに明らかなように、いわば陳伯達の文革のときに見られたようとに明らかなように、おからもう一つの問題は、最近、観念論が批判されていることく現われていないという問題があるわけです。

でなくて、ほぼ、すでに九全大会のときに解体してしまっ て いその後、文革小組としての独自の活動も何も行なわれ な い だ けと、それから、いうまでもなくこの陳伯達の問題は、陳伯達だけと、それから、いうまでもなくこの陳伯達の問題は、陳伯達だけと、それから、いうまでもなくこの陳伯達の問題は、陳伯達だけと、それから、いうまでもなくこの陳伯達の問題は、陳伯達だけ出てきてもいい問題ですけれど、それが全然出ていないというこ出、大衆討議にかけられているということは、一般情報としても中国の五四年憲法を決めたときのように、憲 法 草案 が審議さ

した。いう人たちは九全大会以後一年ぐらいの間に次々に消えていきまいう人たちは九全大会以後一年ぐらいの間に次々に消えていきま中は革命委員会の各地の主任になっていたんですけれども、そうループの中堅幹部として活躍しつつあったグループ、特にこの連ん。そこへもってきて、従来、陳伯遠と一緒に、いわば毛沢東グ

たとえば山西省の劉格平、これは山西の武闘もからんでいるとにますけれども、それから山東省の王効禹、それから湖南省の思いますけれども、それから山東省の王効禹、それから湖南省の思いますけれども、それから山東省の王効禹、それから湖南省の思いますけれども、それから山東省の王効禹、それから湖南省の思いますけれども、それから山東省の王効禹、それから湖南省の思いますけれども、それから山東省の王効禹、それから湖南省の思いますけれども、それから山東省の王効禹、それから湖南省の思いますけれども、それから山東省の王効禹、それから湖南省の思いますけれども、東伯達がある。

思います。題が一方であるわけであります。次にその問題に触れてみたいと題が一方であるわけであります。次にその問題に触れてみたいとの九月の『異変』以後は別として、黄永勝の著しい台頭という問これに対して、私が従来からいっていることですけれども、こ

る。これらの人たちは、たとえばメーデーとか何かにも北京に行以後の問題として、いわば地方軍部の発言権が非常に強化してい衰する人物として黄永勝がうってつけである。それから九全大会造の中で軍人の力が非常に強くなった。その強い軍人をまさに代えられますけれども、やはりそれは、文革以後に、中国の権力祿厳永勝の問題は、なぜ彼が台頭したかという理由がいろいろ考

を関いて地方に蟠踞しているわけですけれども、具体的には南京がないで地方に蟠踞している。 下は、かつてさかんに批判された黄永勝が台頭してきたこととの を変をなしている。同時に、黄永勝の台頭によってさらに中堅の を変をなしている。同時に、黄永勝の台頭によってさらに中堅の を変をなしている。同時に、黄永勝の台頭も、黄永勝ぞのものが らいに昇格している。これらの人物の台頭も、黄永勝ぞのものが らいに昇格している。これらの人物の台頭も、黄永勝ぞのものが らいに昇格している。同時に、黄永勝の台頭も、黄永勝ぞのものが を変をなしている。同時に、黄永勝の台頭も、黄永勝でループと見 で黄永勝はこういう連中と同じような軍人だと見ていいと思いま 軍区の韓先楚、こういうような人たちはいわば中国の五大軍区な すけれども、にもかかわらず、彼はそういうもののいわばリーダ すけれども、にもかかわらず、彼はそういうもののいわばリーダ すけれども、にもかかわらず、彼はそういうもののいわばリーダ

ンのもとで六九年秋以降出てきているわけです。じ込めたその功徴と実徴、これが特に周恩来とのコンビネーショも、中ソ戦争の危機を回避させ、いわば林彪の九全大会路線を封それから四番目に、これは一番重要な問題だと思いますけれどというものが現在の状況にマッチしていた。

それから三番目に、やはり黄永勝に見られる一種のリアリズム

問題が黄永勝台頭の背景にあろうかと思うんです。線というような発想をかなり持っているわけでありまして、その勝はどちらかというと第二次中間地帯論的なはば広い国際統一戦それから、最近の米中接近にからむんですけれど、いわば黄永

〉周恩来の時代

それから第三の周恩来グループの復活の問題ですけれど、最近と、それから第三の周恩来グループの復活の問題ですけれど、ということが事実であったにしても、彼の名前が消えていたことを整まいろいろ触れられておりますけれど、やはり常識的なことを整まいうことが事実であったにしても、彼の名前が出てきているということ、それからこの十月に、対日関係の責任者であったの象徴的な妻われとして今年の九月に陳毅の名前が出てきていたの象徴的な妻われとして今年の九月に陳毅の名前が出てきているということが事実であったにしても、彼の名前が消えていたことを整まいうことが事実であったにしても、彼の名前が消えていたことを整まいうことが事実であったにしても、彼の名前が消えていたことを整まいうことが事実であったにしても、彼の名前が消えていたことを整まいうことが事実であったにしても、彼の名前が消えていたことを整まいうことが事実であったにしても、彼の名前が消えないたとを整まいる。

いうものが歴然とするだろうと思います。いうものが歴然とするだろうと思いますと、かつて陶鉾が、周恩来に別題をいろいろ見てみますと、今いった陳伯達、黄永勝、周恩来の出た書記に復活している、それから同じように黄永勝と一緒にの出た書記に復活している、それから同じように黄永勝と一緒にの出た書記に復活している、それから同じように黄永勝と一緒にの出た書記に復活している、それから同じように黄永勝と一緒にの出た書記に復活の副部長であった張平化が陶鉾グループとしてしたときに宣伝部の副部長であった張平化が陶鉾グループとしているような問題を表すと、かつて陶鉾が失脚というものが歴然とするだろうと思います。

ただ、私の、これはいわば仮説なんでありますけれども、そう

の劉少奇、鄧小平の政治ラインであり、 これ に 彭真、周揚、康 中国論』(脊木街店)から引用してみますと、私は文革開始以前 今回もどうも同じように予測し得るといえるんではないかと思い あるんです。このときと同じような分析方法で考えてみますと、 ーンになっているように思われる、といったことをむいたことが 委員ないしは党中央委員候補の有力中堅グループが積極的なブレ 生、劉寧一、劉瀾灂、認震林、陶鋳、呉修権、廖承志らの党中央 の一九六三~四年の時点で中国共産党の現在の政治的総路線の実 究における困難性を指摘して、そういう分析のどこが正しく、ど ですけれど、近頃、岡部達味さんなんかも、現状分析的な中国研 です。そのときも同じような方法を用いて分析したことがあるん 沢東ではなくて劉少奇グループが中国政治の第一線に立っている くないんですけれど、かつて一九六三~四年のころに、どうも毛 析方法について、何か、いわば功嶽、手柄としていうつもりは全 質的中枢は毛沢東ではなくて、党内、カッコづきの最左派として こに欠陥があったかということを、われわれ、見ておかなくちゃ んじゃないかということをいったり、沓いたりしたことがあるん けですが、私はかなり確率の高い仮説ではないか。私は自分の分 いう仮説によってしか今の中国はやっぱり見ることができないわ いけないといっておりますので、ちょっとここで私の著沓『現代

た。それから政治局常務委員を含む二十五人の政治局員および同これは従来の七人ではなくて五人の常務委員を決定い たし ましいと思います。九全大会はご承知のように中央政治局常務委員、そこでもう一へん、中央リーダーシップの問題にかえってみた

るわけです。 るわけです。 るわけです。 この間の消息によって分析してみますと、まずトップ・ファイブ についてですが、トップ・ファイブそのものが解体、ないしは形 能化しているということがいえるわけで、陳伯建、康生の二人が 能化しているということがいえるわけで、陳伯建、康生の二人が 能化しているということがいえるわけで、陳伯建、康生の二人が は一したのではないかという衝撃的な事態を考えると毛沢東は指導力 したのではないかという衝撃的な事態を考えると毛沢東は指導力 との間の消息によって分析してみますと、まずトップ・ファイブ この間の消息によって分析してみますと、まずトップ・ファイブ

でいっていっぱ況の中で、はたして米中接近というような大転換を かという問題がひっかかってくるわけだが、けれども、次に中央政 かという問題がひっかかってくるわけだが、けれども、次に中央政 かという問題がひっかかってくるわけだが、けれども、次に中央政 かという問題がひっかかってくるわけだが、けれども、次に中央政 かということは全くなくなっております。康生が×、毛沢東が が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、彼独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、彼独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、彼独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、はたして米中接近 ということは全くなくなっております。康生が×、毛沢東が が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、は独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、がともに消息 が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、な独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、な独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、な独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、な独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、な独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、な独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、な独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、な独自の論文を が文元もかつてのように彼独自の演説をしたり、な独自の論文を が文元もいうことができるかどう

的な地位をとどめているだけで活動については?。それから朱徳、なかで唯一人クローズ・アップされていて完全に〇、劉伯承は名目ちを考えてみますと、葉剣英は最近、相次ぐ軍首脳の消息不明のそれから私の仮説に従って、旧行政官僚と軍部と見られる人た

ら紀登奎が〇、李雪峰は×、李徳生が〇。 はいわば名目的な指導者である。謝富治は〇で?がつく。それかったけど最近になって?。董必武、これは〇ですけれど、董必武れから李作閼が?、邱会作も〇、周恩来が〇、黄永勝は当然〇だ地方の有力な二人の軍人についても?です。李先念は〇です。そ彼でさえ健在ではありましょうけれど?。許世友、陳鑓縣、この彼でさえ健在ではありましょうけれど?。許世友、陳鑓縣、この

に思います。 に思います。 に思いますと、その下も動揺と失墜者が相次いでいるよう をうかといいますと、その下も動揺と失墜者が相次いでいます。 とうかといいますと、その下も動揺と失墜者が相次いでいます。 とうかといいますと、その下も動揺と失墜者が相次いでいます。 とうかというふうに見てみますと、中央委員会、政治局、いわばト

◇内政と外交の関連

い。 内政と外交との関連、特に政策決定の問題をひとつ考 えて み たり、非常に大まかなんですが、次に二番目の問題として、中国のり、非常に大まかなんですが、次に二番目の問題として、中国の以上が、報告の第一部の九全大会以降の政治動向についてであ

忠雄さんのすぐれたご研究もあるわけですけれど、中華人民共和の政策決定過程における内政と外交の関連の問題については石川われているように、それだけでは確かに一般論であります。中国交との問題といっても、これは永井陽之助さんもしょっちゅうい味さんともこの問題を討論する機会があったんですが、内政と外味さんとまたの問題を討論する機会があったんですが、内政と外味さんと表にいる近のNHKのテレビで、野村浩一さん、岡部建私、実はつい最近のNHKのテレビで、野村浩一さん、岡部建

鮮戦争という問題があるだけに、強硬状況である。 「世戦争という問題があるだけに、強硬状況である。 「世戦争と急進の入れ返しということではないわけで、むしろたんに穏歩と急進の入れ返しということではないわけで、むしろたんに穏歩と急進の入れ返しということではないわけで、むしろったに穏歩と急進の入れ返しということではないわけで、むしろに回げるする。これは革命直後だということ、それから特に三反・五反運動とか、土地改革が進んだということ、これは、緊張状況がある場合の対外政策における強硬路線との関連は、緊張状況がある場合の対外政策における強硬路線との関連は、緊張状況があるだけに、強硬状況である。

題がいろいろあることは私がいうまでもございません。 題がいろいろあることは私がいうまでもございません。 それから五七年から五九年までは国内的な緊張がございまた。 これは「百家争鳴運動」の反動としての反右派闘争から大躍す。これは「百家争鳴運動」の反動としての反右派闘争から大躍す。これは「百家争鳴運動」の反動としての反右派闘争から大躍さの党内抗争、特に中国の内部の問題として重要なのはチベッらとの党内抗争、特に中国の内部の問題として重要なのはチベット事件ですね。この時期は対外的にはやはり強硬路線であって、上事件ですね。この時期は対外的にはやはり強硬路線であって、上事件ですね。この時期は対外のにはやいるというには、正の内にはというには、国内的には緩和と見ていいわけ次に五四年から五六年までは、国内的には緩和と見ていいわけ次に五四年から五六年までは、国内的には緩和と見ていいわけ次に五四年から五六年までは、国内的には緩和と見ていいわけ

ます。から対外的にはこの間はまさに明確に中間地帯論の時期でございから対外的にはこの間はまさに明確に中間地帯論の時期でござい次に六○年から六五年までは対内的に緩和、経済調整期、それ

中間地帯論というのはどういうふうに評価すべきか。あの時期

得るかと思いますけれど、実は毛沢東政治を中軸に考えますと、を持っていたのではないか。だから強硬路線だという見方もあり硬路線ではないか。中ソ対立についても、非常に中国は強い態度のインドネシア九・三〇事件というのは、非常にはね上がりの強

これはいわば実権派の日和見政策であったわけでございます。

定していいのではないか。 定していいのではないか。 定していいのではないか。 定していいのではないか。 定していいのではないか。

変化が現われてきたという形で柔軟路線に移っていく。う、対内緊張緩和の時期で、この時期に米ソ、米中関係の大きなあとの六九年後半から七一年は、いうまでもなく文革の収拾といの時期は対外的には造反外交で知られる強硬策。それから、そのの時期は対外的には造反外交で知られる強硬策。それから、そのの時期は対外的には造反外交で知られる強硬策。それから、こ

以上のような図式化はあまりにも常識的なことで、この研究会

周期があるという問題が指摘できると思います。

私が申しあげるまでもないんですけれど、あまりにもきれいに

内の緊張あるいは緩和というものを指導者がどういうふうに感ず ないだけに、中央リーダーシップにおける闘争とか、そういう国 非情報性の社会であるから、つまりそのフィード・パックがきか 対外政策に何らかの形のはね返りをもたらす。それからやっぱり 小するわけで、内政的な緊張緩和の時期を具体的に見て みま す っても内政上の緊張の時期には外交政策のオプションは非常に縮 るかという点が、重要であり、やはりこう見てみますと、何とい な官僚組織がないだけにそれだけに党内闘争というものが、勢い く理解しておかなければいけない。特に中国の場合には、何てい 策をめぐって、常に激しい党内闘争があったということをともか の歴史には、現代中国の政治過程においては、こういう、内外政 でもいえることだと思いますけれど、少なくとも中国のこれまで れと同時に党内闘争がやっぱり一貫してあったということを忘れ いますか、いわば非官僚国家、外務省とか、国務省のような尨大 てはいけないわけでございます。これは今回の米中接近をめぐっ か、対外外交、国際関係のインパクトは非常に強いんですが、そ ただ、問題は、対外政策を決定する要因として、国際 環境 対外政策のオプションが非常に拡大しているわけでございま

いか。ただ今後の七〇年代というのは、中国自身がいわば国際化もかくそういう状況があるということを考えてみていいんじゃなよりますと安定と不安定ということを申しておりますけれど、とで、私はそういうふうに緊張と緩和、あるいは岡部さんの説に

かく見ておいていいのではないか。 の大きな修正と、それに対するいろんな反作用の問題ともから向の大きな修正と、それに対するいろんな反作用の問題ともから題なんであって、そういうことが国内政治における九全大会の方とがそのまま踏襲され得るかどうかということは、実は今後の問時代を迎えるわけで、国際化時代の中国にこういう従来のパター

◇起こるべくして起こった異変

です。それは日本の新聞が中国の内政面についてフォローするこ **導制ということがさかんに強調されている。それがだんだん上の** の工場なんかをモデルにしまして民主集中制との関連で、集団指 題も実は去年あたりから『人民日報』の小さな記事の中に、一つ はほとんど伝えられませんでしたが、集団指導制というような問 ジカルに見てみたいんですけれど、たとえばまず、日本の新聞に った『異変』であり、突発『異変』ではないというのが私の見方 なんですけれど、実は、これはある意味では起こるべくして起こ けでございます。そこへもってきて、今回の九月中旬の『異変』 非毛沢東化と見られるような現象も個別的にはいろいろあったわ でしたけれども、そんな問題があったり、それからまた、いわば ほうに来ているというようなことはほとんど報ぜられていません れまでにいろいろ伝わっている情報をちょっと整理してクロノロ ると、その意味は非常に深いような気がいたします。そこで、こ 来事についての判断というのは、まさにスペキュレーションかも しれませんけれど、ただ今、私が申しあげたような背景の中でと **最後に最近の出来事との関連に移りたいと思います。最近の出**

全大会の文献および憲法草案の回収説、これは八月末に回収され報』によってまず伝えられております。それから九月九日に、九写真、スローガンが一部消えたということがこれは香港の『星岛日か。最近の出来事を少し整理してみますと、九月三日に毛沢東のとを放棄していたが故にそういうふうに見られただけで は ない

は『紅旗』の編集者の費任者ですから、その改組説は十分に推測きております。これは陳伯達が失脚しているとすれば、当然、彼それから九月十三日には、『紅旗』編集部の改組説が伝わってなり確度が高いように思います。

はかなり疑う点もあるわけでございますが、この二つの問題はか私も香港にいまして、『星岛日報』の信頼度というものについて

ているということを、やはり香港の『星岛日報』が伝えている。

謎の三日間という問題があるわけですね。この謎の三日間のうちできる。そこへもってきて十二日夜から十五日にかけてのいわば

で、やっぱり一番大きいのは国内航空の停止という問題、国内線

思います。 事上、諜報的に確認しているわけですから、これは事実だろうとこれはのちに国府も、アメリカも、いろいろなことをやって、軍「ワシントン・ポスト」紙香港特派員電なんですけれど、しかしの停止ということで、これを最初に伝えたのは九月二十 一日 の

夜、赤々と灯がついて、車がたくさん築まっていた。それからこれは川崎訪中団が伝えていることですけれど、人民 大 会堂 に、ている周恩来が、外国人代疫と離とも会わなかった。それからこそれからこの三日間は、たまたま最近非常に目立った活躍をし思います。

の十二日から十五日までの謎の三日なんですが、十二日の夜、実

ということがのちになっています。 これはタス通信が伝ということがのちになって明らかになった。 これはアメリカ以降も軍用機がほとんど飛んでいないようです。これはアメリカ以降も軍用機がほとんど飛んでいないようです。これはアメリカリンゴル当局筋が乗っていたとか、黄永勝が乗っていたとか、いろいろ説がございますが、たとか、黄永勝が乗っていたとか、いろいろ説がございますが、たとか、黄永勝が乗っていたとか、いろいろ説がございますが、たとか、黄永勝が乗っていたとか、いろいろ説がございますが、大石十五日ということがのちになって明らかになった。これはタス通信が伝ということがのちになって明らかになった。これはタス通信が伝ということがのちになっています。

はモンゴルの奥深くで中国機が墜落し九名が焼死体で発見され

している。それから次に十九日にAFP電が毛沢東の肖像が一部また地方軍区の有力者、南京の許世友、瀋陽の陳錫聯も姿を消ってきている。今日まで「消息不明」である。おくれて邱会作というような……、呉法憲、李作閼、邱会作はい なおくれて邱会作というような……、呉法憲、李作閼、邱会作はい なってきている。今日まで「消息不明」である。

と、AFP電がパレード中止説を出しました。ほぼ明らかになったわけです。それから九月二十一日になりますですから、これは九月三日に『星岛日報』がいっているのが、て、上海、南京、広東でも消えているといっていた。

で消えているということを伝えて、北京の新京飯店だけではなく

説とかいろいろ流れましたが、これは誤報であるという情報をこて、「ワシントン・ポスト」が伝えている。この間、毛沢東死亡(同じ二十一日に、さっき言いましたように謎の三日 間に つい

私は、今回の異変は、直接中ソ国境には関係ないというふうに見けれど、確かに中ソ国境の問題というのは残っていましょうが、

を申上げます。 こでは全部省いていますから、今日まで確認されているものだけ

ことを伝えております。外交筋の情報として、中国に軍事戒厳体制がしかれているという「十二日になりますと、「ニューヨーク・タイムス」が、北京

○伝えております。
 ○伝えております。
 ○広えております。
 ○広えております。
 ○大方のでは、パレードを中止する」というようなことを、いろいまるといっていた。それから『読売新聞』が「地道に国家を建設をいって「北京、パレード中止説を一笑」と打ったり、それからといって「北京、パレード中止説を一笑」と打ったり、それからといって「北京、パレード中止説なんていうことはあり得ない本の『共同通信』がパレード中止説なんていうことはあり得ない本の『共同通信』がパレード中止説なんていうようなことを、いろいるには、いっている。

定を誇る」ともいっています。 です。従来、その中国報道の主体性が高く評価されているわけてす。従来、その中国報道の主体性が高く評価されていた『毎ことと、関係ある」と、川崎さんなんかの意見を伝えているわけこ十三日は、香港発特派員電が「パレード中止は、全人大が近い二十三日は、『毎日』のことを言わなかったんですが、『毎日』もけれど、『毎日』のことを言わなかったんですが、『毎日』も

これは、やはり北京の意向を汲もうとした報道だと思うんです説は、中ソ国境の緊張と関係があるという説です。もう一つ、日本の新聞が特徴的に流した情報は、パレード中止

と計り、こ。日に中国政府のスポークスマンが正式発表として、パレード中止日に中国政府のスポークスマンが正式発表として、パレード中止それから、そういうふうな奇妙なことがあった挙句、翌二十三

ていたものですね。

「は、アス通信が中国の異変についります。これは従来、周恩来が主催して三十日の夜やって、園慶節のレセブション、大夕食会も中止するということを言て、園慶節のレセブション、大夕食会も中止するということを言て、母初の論評を行ない、同時に外的要因説、つまり中ソ国境説で、最初の論評を行ない、同時に外的要因説、つまり中ソ国境説で、最初の論評を行ない、同時に外的要因説、つまり中ソ国境説で、最初の論評を行ない、同時に外的要因説、つまり中ソ国境説のます。やがて九月二十五日には、タス通信が中国の異変についります。

と思います。 と思います。 と思います。 と思います。 と思います。 とのレーカーのレセンションを見てみません に近近の一大な問題だろうは前夜祭にも出ていない。 これもやはりかなり重大な問題だろうにの二人だけで、二十五人の中央政治局質務委員の中では、董必武、この二人だけで、二十五人の中央政治局常務委員の中では、董必武、この二人だけで、二十五人の中央政治局質のするとして、それれは、いわばそういう国家元首に代わるようなものとして、それれは、これを主催したのは董必武と思います。

こと。「個例の毛沢東、林彪の写真が『人民日報』にのらなかったという「個例の毛沢東、林彪の写真が『人民日報』にのらなかったというが中止されたということ、それからさらに大事な問題は、やはりはどういう変化があったかというと、申すまでもなく、パレードはどういう変化があったかというと、申すまでもなく、パレード

それから三番目の問題として、最も重大な問題だと思われるの

きに、社説を出せなかったというところに実は問題がある。に引入れよう、国連の代表権問題があのような形で進んでいるとまさに社説にむくべきであるし、まさに世界は、中国を国際社会決別とか、エネルギーを生産に注ぐとかいうことであればそれを決別とか、エネルギーを生産に注ぐとかいうことであればそれを決別とか、エネルギーを生産に注ぐとかいうことであればそれをは、共同社説つまり「人民日報」ほかの社説が出なかったというは、共同社説つまり「人民日報」ほかの社説が出なかったという

ということを伝えました。アメリカ政府筋の報道として、初めて林彪里病説を確認しているアメリカ政府筋の報道として、初めて林彪里病説を確認しているです。毛沢東についてはとにかく、まあ疑問を解消した。それから十月八日ですけれど、ここで、毛沢東が出てきたわけ

ことを言っております。

行を考えているらしいと、これは東欧筋の情報とハンガリー筋でが、毛沢東が来年の一月ごろ、党大会を開いて、集団指導制の移報道している。それから十七日にイギリスの、「オブザーバー」げたんですけれど、それを、当日の新華社は、そのことを省いてれたんですけれど、そのときに北鮮側は、林彪の名前を乾杯にあ一方、十五日になりますと、北鮮で中朝レセブションが行なわ

それから十月十八日には北京放送が党の集団指導体制の拡充をすか、これは割合に確度が高いかもしれません。

え、同時に写真も出している。 はそうという解放軍瀋陽軍区部隊の論文を繰返し放送している。 におが、キッシンジャーと会談していることを「人民日報」は伝来、それから葉剣英、葉剣英は政治局員であると同時に、党中央来、それから葉剣英、葉剣英は政治局員であると同時に、党中央来、それから三十一日、周恩の古事委員会の副主席です。それから四年来、実は民集中制とにおが、キッシンジャーと会談している。とれは私が先ほど言っているようにこの一年来、実は民集中制とにおが、同時に写真も出している。

は、香港情報です。の名前で出ていたんですけれど、葉剣英の名で出たという、これの名前で出ていたんですけれど、葉剣英の名で出たという、これくれから葉剣英が、解放軍放送を通じて、従来、軍令は黄永勝

◇林彪は単なる病気でない

いるというのが二十一日にある。

それから同じような情報として広州でも、林彪の写真が消えて

ションをやっております。
抑えることに成功したんではないかという、いわばスペキュレー抑えることに成功したんではないかという、いわばスペキュレーですけれど、周恩来が康生と組んで林彪亡きあとを狙う黄永勝をそれから二十二日、イギリスの「デーリー・テレグラフ」なん

ただ、林彪問題というものを、九全大会以降の全過程の中で見を考えますと、私にも当然、断定はできません。てみたんですけれど、さて、どういう問題があるのかということ以上で、最近の情報の中で比較的確度の高いもののみを整理し

言っているわけです。

ていないというような問題があります。けですね。そしてまた林彪夫人の葉群も、このごろ、ほとんど出り、病気であれば国慶節についても、それなりの扱い方があるわますと、単なる病気ではないということが、十分言えるわけであ

この間の中国の外交政策を周恩来、黄永勝のラインでやっている 台頭が、あまりにもやっぱりめざましかっただけに、それに対す なければならない。ということを、いろいろ総合しますと、どう 米中接近という状況の中ではね返ってくるという状況を十分考え が、呉法憼が関係があったというような問題があるわけです。 ど、たとえば、呉法憼、これは空軍司令でもあります。同時に政 央委員会、政治局を見ても明らかだろうと思います。特に軍の中 とするならば、それに対する反発が当然ある。それは先ほどの中 る、リアクションがあるのではないか。もしも私の仮説どおり、 も先ほどの全人大の問題なんですが、従来も全人大は開く開くと 治局員で副総参謀長なんですけれど、これがかなり問 題で あっ に、いろいろさっきから言っているような問題があるんですけれ 非難していますように、たとえばペトナムなんかの批判が党内に 府筋でも掴んでいる情報です。それからどうも中国機の撃墜事件 それから、三番目の問題として、米中接近以来、北ペトナムが それから黄永勝問題が、二番目にあるわけで、これは黄永勝の 黄永勝を襲撃したんではないかというような、これは日本政

けれど、こういうことを考えますと、国慶節前に、全人大を開こ延期通達が出ているという、これは国府の国防部の情報なんですこれについては、最近の情報の中で、九月十七日以降、全人大

って開かれないままになっているわけです。 いうことになった。これはすでに一九六四年から、七年間にわたので、もし、そういう通遠があったとすれば、これは延ばそうとということは、もうできないという政治過程における変化がきたということは、もうできないというので、もし、そういう通遠があったとすれば、これは延ばそうとですね。すでにかつての革命委員会代表を、この全人代表にするですね。すでにかつての革命委員会代表を、この全人代表にするということになった。

いうものが九月中旬もしくはその直前に開かれたと思います。そ言うと、例の中央工作会譲になるのかもしれませんけれど、そうう、三中総まで拡大できないのではないか……。 ひ、三中総まで拡大できないのではないか……。 むしんはそれ以前に政治局会譲が開かれなければいけない。私はもしくはそれ以前に政治局会譲が開かれなければいけない。私はそうしますと、いずれにしても、全人大延期にせよ、九月中旬

ように帰結するか、われわれは大きく注目せねばならないと思いったと思われます。当面、周恩来が大変なリーダーシップを発揮生じたのではないか。ともかく、きわめて深刻な緊急事態が起こったと思われます。当面、周恩来が大変なリーダーシップを発揮生じたのではないか。ともかく、きわめて深刻な緊急事態が起こったと問争」が軍内部をまきこみ、林彪の地位に政治的変動がうした「闘争」が軍内部をまきこみ、林彪の地位に政治的変動がうした「闘争」が軍内部をまきこみ、林彪の地位に政治的変動がいる。というとのではないからした。異変が今後どのして事態を収拾したように思います。こうして事態を収拾したように思います。

文費の組集部)